



出雲市トキ分散飼育センターのトキ

トキも人も育つまちへ 〈出雲市トキ放鳥〉

島根県出雲市 総合政策部政策企画課プロジェクト推進室 加村光夫

2027年初夏、出雲市で本州2例目となるトキの放鳥が予定されています。

出雲市は、島根県東部に位置する人口17万人のまちで、面積は東京23区とほぼ同じです。中央には出雲平野が広がり、斐伊川・神戸川の2大河川が流れます。昨年ラムサール条約湿地登録20周年を迎えた宍道湖・中海は、日本最大の汽水域であり、毎年4万羽以上のガン、カモ、ハクチョウ類が来る自然豊かなまちです。出雲と聞いて皆さんがまず思い描くのは、縁結びの神様で有名な出雲大社ではないでしょうか。過去の文献には、トキが出雲に生息していたことに加え、「白からす」「牛からす」という方言名も併記されており、出

雲地方においてトキは広く身近な存在であったことがうかがえますが、佐渡や能登とは異なり、多くの方が「なぜ出雲でトキ？」と思うと思います。そこには中国漢中市とのご縁がありました。

現在国内で生息するトキは、中国陝西省漢中市洋県で発見されたトキの子孫となります。出雲市は、1991年から漢中市と交流をはじめ、1996年に友好都市協定を締結しています。交流を深める中で、漢中市におけるトキの飼育費用を負担するなど、トキの保護増殖事業に取り組み、そして、市民にトキの美しさを知ってほしいという思いから、国のトキ保護増殖事業にあわせ、2011年から分散飼育をスタートすることになりました。

2022年にトキの本州における放鳥候補地に選定されてからは、新たにプロジェクト推進室を設置し、全庁横断的に取り組みを進めており、機運醸成・普及啓発、生息環境整備に加え、トキを活用した農作物等の高付加価値化、新たな商品開発、観光メニューの創出などに取り組んでいます。

出雲市の取り組みの特徴の一つとして、関係団体や企業との連携が挙げられます。トキの放鳥・野生復帰は、行政のみでできるものではありません。多くの人の共感と賛同、そ

して行動が必要です。

2005年設立のNPO法人いずも朱鷺21では、普及啓発活動に加え、トキ公開設や学習コーナーの管理運営、オリジナルグッズの製作・販売などに取り組んでいただいています。

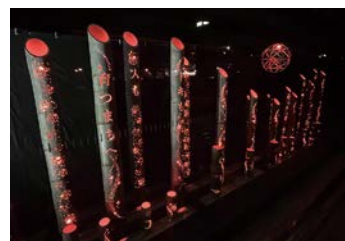
また、市内に立地する出雲村田製作所、島根島津、島根富士通の3社におかれては、地元営農組合と連携し、自主的に田んぼビオトープを整備され、生き物調査イベントなどを実施されています。昨年度には、市と連携し、市のイメージカラーである「トキ色」の竹あかりワークショップイベントに取り組み、竹の切り出しから竹あかりづくり、ライトアップまでタイアップして取り組んでいただきました。

放鳥予定地である稗原地区においては、餌場環境整備はもとより、交流人口の拡大、関連商品の開発などに向けて、取り組みが進みつつあります。

このほか、複数の企業において、社用車に自社負担でトキをラッピングしていただき、走る広告塔としてPRしていただくなど、機運醸成に協力していただいています。



企業3社による田んぼビオトープ



トキ色竹あかりライトアップ



トキをラッピングした大型トラック

市の特徴的な事業としては、オリジナル絵本を作成し、3歳児健診時に全員にプレゼントしています。この絵本には、絶滅危惧種も含め、出雲市に生息する約60種の動植物が登場します。絵本を何度も読み返すなかで、トキだけでなく、多様な生き物にも目を向けていただき、幼少期から出雲の自然豊かな環境に関心を持つてもらいたいと考えました。

トキの放鳥は、単一の種を守るという取り組みではなく、地球環境保全に対する意識向上、里地里山の保全、生物多様性の維持につながるものであり、目的ではなく、人と自然との共生に向けた手段です。

環境問題は直接被害がない限り、わかりにくいものです。トキの野生復帰を通じて、環境問題を可視化することで、共通認識を持ち、次世代にこの出雲の豊かな自然が残せるよう、ネイチャーポジティブ（自然再興）に取り組んでいきたいと考えます。

合言葉は「トキも人も育つまちへ」。出雲市は、この豊かな自然環境を守り次世代へつなぎ、多様な生きものにとっても人にとっても住みやすい暮らしやすいまちをめざします。

今こそ踏み出す、 真のコウノトリ野生復帰

日本コウノトリの会「ラムネット」理事

永瀬倅大



人工巣塔での子育て

兵庫県豊岡市では、一度日本の空から姿を消したコウノトリの野生復帰に取り組んでいます。

2005年の放鳥開始以降その羽数は順調に増加し、今では豊岡で23カ所、全国では80カ所以上で営巣し、毎年100羽以上のヒナが巣立っています。野外に暮らすコウノトリが1000羽に達する時代は目の前です。ここに至るまでの取り組みの概略を報告し、これからの課題を皆さまと共有できればと思います。

コウノトリは肉食の鳥で、飲み込めれば昆虫などの小さなものからナマズのような大きなものまで何でも食べる大食漢です。かつて野生絶滅に追い込まれた大きな要因は、農業の近代化でした。圃場整備や水路の三面張り、化学肥料や農薬の使用によって、彼らの命を支える田んぼの生きものたちが大打撃を受けてしまったのです。

そこで豊岡では、人工飼育での繁殖を進める一方、再び野外で生きていける環境づくりを進めてき

ました。その中核となったのが、農業に頼らない生きもの共生型農法への転換です。2025年現在、507ha（全水田面積の19%）まで拡大しています。市内の学校給食を生きもの共生型無農薬米にする取り組みも進めており、今年後半には90トン全量実施にこぎつける予定です。併行して、休耕田や放棄田のビオトープ化も行っており、当会も汗を流しています。

こうした田んぼを中心とした取り組みの積み重ねが、今日の野生復帰の進展につながったのだと思います。

コウノトリは全国各地へと広く飛来し、繁殖するようになりましたが、急な展開でもあるため、受け入れ地では準備不足によりさまざまな課題が出ています。適切な営巣木がないのでやむなく電柱や鉄塔等の人工物へ営巣するのですが、通常はコウノトリの感電や停電のリスクから巣は撤去されることとなります。代替策としては、近くに人工巣塔を建てることですが、降

って湧いたような話なので、行政の消極姿勢、資金調達、地域住民との合意形成など、調整・展開が十分にできないというのが実態です。

傷病鳥への対応も急務

です。コウノトリは特別天然記念物であるため、救護の窓口は各自治体の文化財担当となりますが、対応方針はほとんどないのが実情です。救護体制の整備が求められます。

このように、羽数が増加してレッドリストのランクも引き下げられ、一見「野生復帰は成功した」かのように見えるかもしれませんが、しかし、現在の順調な数字の裏で、「隠れていた問題が表に出てきた」と感じます。

コウノトリ野生復帰の本懐は、単に鳥の数を増やすことではありません。大量生産、大量消費を乗り越えて、コウノトリをはじめとした多様な生きものとの共生活動を通じ、自然や他人、そして地域への「思いやり」が人々に定着することだと考えています。コウノトリたちが全国へ羽ばたいている今だからこそ各地がつながり、持続可能な共生社会の構築に向けてみんなで協力し合って歩みを進めていきたいと思います。コウノトリにはその力があります。



農作業中の水田で餌を取るコウノトリ



ボランティアによる湿地での池づくり

吉野川河口干潟の現状と「しおまねきサポーターズ」

とくしま自然観察の会 副代表 長澤陽子

吉野川河口干潟は徳島市中心部のすぐ近くにありながら、絶滅危惧種のシオマネキをはじめ、多くの希少な生きものが生息する貴重な自然環境です。

この原稿の依頼をいただいた5月末頃、干潟では繁殖期を前に生きものたちが活発に動き回り、今年もたくさん青ガニ（シオマネキの稚ガニ）が見られることを期待していました。

ところが6月3日、台風6号の通過後に干潟を訪れると、これまでに見たことのない量の流木やヨシ片、プラスチックごみなどが漂着し、干潟一面を覆っていました。このままではシオマネキたちのすみかが失われ、干潟そのものが消滅しかねない状況でした。

そこで予定していた観察会を急ぎよ清掃活動に変更して参加を呼びかけたところ、地元新聞やテレビでも取り上げられ、多くのボランティアが集まってく



「しおまねきサポーターズ」のパンフレット。募集の詳細はホームページを参照してください。https://www.shiomaneke.net/

たさいました。しかし今回は人力だけで撤去できる状況ではなく、国土交通省に重機による撤去を要望しました。30年間で初めて干潟に重機が入ることとなりましたが、生息環境への影響を少しでも減らすと、市民による手作業でのごみ撤去も続けています。



漂着物で覆われた吉野川河口干潟

ます。ホームページや活動会場で登録でき、行事予定などを主にメールでお知らせしています。今回の非常事態をきっかけに、吉野川河口干潟の現状や重要性を知っていただく機会も増えました。今後もサポーターズの輪を広げながら豊かな干潟を守り、ラムサール条約湿地登録をめざして活動を続けていきたいと思います。



秋吉台地下水系（山口県）

Mine 秋吉台ジオパーク推進協議会 岩本双葉

山口県美祿市に広がる秋吉台は、日本最大級のカルスト台地で、ユネスコ世界ジオパークに認定されたエリア内にあります。秋吉台の地下には、石灰岩の中を流れる地下水系が発達しており、2005年に「秋吉台地下水系」がラムサール条約湿地として登録されました。ここは、数億年の地球の歴史と、そこに暮らす生き物、そして人々の営みがつながる、かけがえない環境です。

秋吉台を構成している石灰岩は、約3億年前のサンゴなど海の生き物の遺骸などが積み重なってできたものです。その後、プレート運動によって長い時間をかけて現在の場所まで移動し、隆起した石灰岩が雨水などによって少しずつ溶かされることで、現在のカルスト地形が形成されました。

石灰岩には水が通りやすい割れ目があり、秋吉台の地下には迷路のような洞窟や水の流れが発達しています。洞窟内は光が届かないため、暗く栄養の少ない環境に適応した独自の生態系が形成されています。例えば、目がなかったり、体が白く、体内が透けて見えるほど薄い表皮でできているなどの特徴を持つ生物や、希少な淡水性貝類などが生息しています。また、洞窟はコウモリのすみかにもなっており、コウモリが運ぶ有機物や排泄物（グアノ）は、地下の生態系を支える大切な栄養源になっています。



キクガシラコウモリ ジオツアー



秋芳洞

秋芳洞、景清洞、大正洞などの鍾乳洞も、この地下水系の一部です。地上からは見えない地下の水の世界ですが、多様な生き物を支える重要な役割を担っています。



塩田の名残りの古い堤防

和白干潟の「生きもの引越し作戦」

ウエットランドフォーラム／ラムネットJ理事 松本 悟

福岡市東区の志賀島から和白地域では、古く（万葉集の時代）から「塩」を作っていました。塩づくりは明治後期まで続き、大規模な塩田の堤防は和白干潟の地形の一部を構成しています。現存する堤防は、江戸時代の終わり頃に石積みで造られましたが、古くなってヒビが入ったりしているもので2019年から改修工事が始まりました。今回の堤防改修工事は約850mで10年計画です。

この堤防には長い間に貝類やカニ類など多くの生きものが暮らしています。クログチやムラサキイシノコ、イボニシ、タマキビ、イシダタミなど数えることが不可能なほどたくさん付いています。せまい干潟の転石の表面にはウミミナヤタテジマイソギンチャク、下にはイシガニやガザミ、テッポウエビなどがよく見られます。堤防の隙間にはフタバカクガニやカクベケンケイガニ。カキ殻からはギンボ類もよく出てきます。

堤防は和白干潟周辺で唯一残された「垂直護岸」で、堤防の高さによる貝類の住み分けがわかりやすい場所でした。例えば、タマキビは堤防の下の部分にいて、マルウスラタマキビは60〜70cmくらいの高さ、海水の嫌いなアラレタマキビは150cmくらいの高さ...などです。



堤防の生き物を救え!!



工事が進んで干潟が消えていく



堤防マップ

工事は、古い堤防の海側に重機が入る仮設道路を造り、古い堤防を壊し、新たな石積み堤防を造ります。残念ですが、この堤防に付いている貝類は全て死んでしまっています。また仮設道路の下敷きになって死んでしまう生きものたちもたくさんいるでしょう。18年前に改修が終わっている堤防を見ても生物の回復は貧弱です。

ウエットランドフォーラムでは、堤防上の遊歩道が封鎖される直前にガタレンジャー（子ども調査隊）たちと堤防の観察会をしました。そしてこの観察会がきっかけで、みんなで「生きもの引越し作戦」をやることになりました。私たちはこの堤防改修工事には反対していません。多くの人が利用する遊歩道の安全を考えれば必要な改修工事であることは理解しています。

引越し作業は、干潟に降りてカニを捕まえたり、岩や堤防の表面に付いている貝を拾ったり、たくさん生き物が付いている小さなカキ殻などを運びます。引越し先は約500m離れた場所で、堤防の改修工事が終わった同じような生物がいる環境に運びます。リリースの時も、堤防の高さや転石の上下などを注意しながら同じような環境に戻します。小さな力でも、少しの成果でも、という気持ちで作業を2022年から5回行いました。大人はこの作業を「生物多様性を守るため」、「環境破壊のリスク回避」などと説明してききましたが、ガタレンジャーは「だってかわいそうじゃん!!」の一言です。子どもたちにとって直接小さな生きものの命を救う経験はとても大きな「心の体験」になったと思います。

工事の進捗により、5月17日の「生きもの引越し作戦」が最後になりました。今回は参加者43名、引越させた生物種は55種類。8月に引越した生きもの観察会をします!!

ラムサール・ネットワーク日本 2026年総会報告

ラムネットJは2026年通常総会を、A/P秋葉原会議室とオンラインのハイブリッドで開催しました。議案として2026年度事業報告と収支決算、短期計画「2025・2027」評価、2026年度事業計画と収支予算について審議され、すべて承認されました。

2025年度は7月にジンバブエで開催されたラムサール条約COP15に参加し、環境省、農水省、韓国政府、韓国NGO、FAOなどの協力の下、「OECMと田んぼで達成するネイチャーポジティブ」をテーマとしたサイドイベントを開催しました。また、2023年からスタートした「渡良瀬プロジェクト」は2025年までで第1期が終了しましたが、第2期として2026年から3年間のプロジェクトが行われることが決まりました。

2026年度は、各地でラムサール条約湿地登録を目指す団体や、湿地の再生・保全に取り組む団体との

連携強化を行うとともに、日本政府や各地の行政に対して政策提言を引き続き行っていくことが確認されました。

総会審議終了後には、沖縄県・浦添西海岸の環境アクセスの問題点、岡山県・たましまの河口干潟と人工島での保全活動、フードテックと湿地の問題などについての報告を共有しました。

久米島プロジェクトで リーフチェック講習会を実施

ラムネットJでは「久米島プロジェクト」として、沖縄県の久米島でさまざまな活動を行っています。5月30日、31日に2地点でリーフチェックを実施する予定でしたが、台風



陸上でのリーフチェックの実習

6号の接近により海況が悪化するなどが予想されたため、調査は中止し、陸上講習会に変更しました。

リーフチェックは、世界100カ国以上で実施されているサンゴ礁の調査手法です。講習会では、魚類・無脊椎動物・底質調査の進め方や、調査対象の見分け方、調査時の注意点などを確認しました。また、海底の模型を使った実習を行い、受講者は記録方法を実践しながら調査手法への理解を深めました。

田んぼミニフォーラム第13回 「節水型乾田直播の問題点」

ラムネットJでは、田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクトの第13回ミニフォーラムを、8月6日（木）18時30分からオンラインで開催します。今回は「節水型乾田直播の問題点」というテーマで、OKシードプロジェクト事務局長の印輪智哉さんなどにお話を伺います。参加方法など、詳しくは以下のページをご覧ください。 <https://rambo10.org/archives/2261>

2025年度 活動計算書 (単位:円)	
※ 2025年4月1日から2026年3月31日まで	
経常収益	
受取会費	956,000
受取寄付金(企業協賛金含む)	776,089
受取助成金等	5,522,224
事業収益	8,594,400
その他収益(受取利息等)	339,527
経常収益計	16,188,240
経常費用	
1 事業費	
(1) 調査研究事業	7,151,267
(2) 保全・再生事業	4,554,191
(3) 普及・啓発事業	80,120
(4) 国際協力事業	5,512,685
(5) ネットワーク推進事業	493,158
(6) その他の事業	0
事業費計	17,791,421
2 管理費	
(人件費)	
賃金・福利厚生費	0
(その他経費)	
事務委託費	591,112
印刷製本費	83,186
旅費交通費	283,818
通信運搬費	130,653
消耗品費	31,738
水道光熱費	19,500
地代家賃	244,440
賃借料	0
諸会費	4,750
租税公課	1,400
支払手数料	36,597
雑費	26,490
管理費計	1,453,684
経常費用合計	19,245,105
税引前当期正味財産増減額	△ 3,056,865
法人税、住民税及び事業税	35,000
当期正味財産増減額	△ 3,091,865
前期繰越正味財産額	13,171,267
次期繰越正味財産額	10,079,402

ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

●郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

●ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。<https://www.ramnet-j.org/join/>にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、オンライン決済サイトSyncable(シンカブル)からクレジットカードで送金することも可能です。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本
(一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇ー九(ゼロイチキュウ) 店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員	賛助会員
	総会での議決権があります	総会での議決権がありません
一般	1口 5,000円	1口 2,000円
団体	1口 10,000円	1口 10,000円
特別	50,000円以上	30,000円以上
企業	—	1口 100,000円

年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2~3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org